

2020年8月16日(日)／説教者：國分美生

説教：「記憶することが未来をつくる」

聖書：申命記24：8～22

元県知事・太田昌秀氏は平和祈念公園を整備するにあたって、戦争体験の教訓の継承の場、そして学びと教育の場となるようにと意識しました。刻銘碑には県民だけでなく、アメリカ兵、日本兵の名前も刻まれています。これは実は他に類を見ないことです。敵味方なく、沖縄戦で命を失った24万余りの人々の名前を思い起こすこと、その人たちにそれぞれの尊い人生があったこと、そしてその命がどのようにして奪われなくてはならなかったのか…それらのことを覚え続ける、そしてそこから学び、平和な未来を創るための道筋としていく。そのような場所は他には、まず聞いたことがありません。

申命記は神とイスラエルの人々の契約を再確認する文書であり、いわば、イスラエルの信仰の意味と目的を、具体的にわかりやすく説明する文書です。奴隷であったエジプトから脱出させてくださった神は、イスラエルの民をご自分のものとししました。神の民であるからには守らねばならない契約がある、ということを申命記は人々にはっきり伝えるものでした。そしてその神との契約は、どんな精神でなされるべきかということが重要であるという点も見えてきます。たとえば今日の箇所からは、社会的弱者に対して、人々はどうするべきかが書かれているわけですが、その動機はすべて、神がイスラエルの人々をエジプトから救い出したという歴史に集約されます。

過去を振り返った時に見えてくるのは決して、幸せだったことばかりではありません。それでも神は「思い起こせ」「記憶せよ」と繰り返します。奴隷として自由を奪われていた時のこと、そしてそこに神がどのように救いの手を差し伸べてくださったか、また、神のみ旨に背いたとき何が起こるか…過去のどの場面にも神は共におられ、特別な関係を築いてくださったことを忘れないために。申命記は、神の愛・神への愛・隣人愛を強調しており、それは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」、「隣人を自分のように愛しなさい」というみ言にもつながります。

過去を知ることは、今自分がこれからどこに向うべきかを指し示します。過去の過ちから学び、間違いを繰り返さないために力を尽くそうという思いも生まれてきます。忘れずに、記憶しつつ、主の平和の業に参加していく。すべての命が尊ばれる社会を目指すことは、隣人を愛することそのもの。そのような形をとおしてしか、わたしたちは神への愛を示すことが出来ないのではないのでしょうか。（國分美生）